

令和元年11月1日発行 巻数/第74巻第11号(毎月1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

2019 November

11月号



主宰の句

安立公彦

蝸のこゑに暮れゆく机上かな

子規庵に残る夕日の糸瓜棚

朝空を飾る白露迢空忌

九十九里浜白波秋気誘へり

水澄むや記憶にしかと竹生島



久保田万太郎の句

さざなみをたゝみて水の澄みにけり

『冬三日月』昭和二十二年

「古奈三養荘にて」の前書きがある。伊豆長岡温泉古奈地区にある旅館である。

微風に波立った水面が、あつという間に元の姿に戻るその束の間の様子をそのまま写しとっている。「さざなみ」と「たゝみて」の音の連なりが心地よく胸に響く。

夏の暑さや行事も一段落し、ほっとしている気持ちに通じるだろう。まさに「水澄む」ような心持である。

太田佳代子

久保田万太郎の句

翁忌やおきなになまなぶ俳諧苦

『流寓抄』昭和二十三年

俳句は浮かぶものと、言っていたらしい万太郎師。交流の深かった作家の、小島政二郎に『俳句の天才―久保田万太郎』なる著作がある。なるほど、万太郎の句を読んで見ると、俳句を作るのが、天才的に巧い。日常の事を詠んで、さりげなく上手いのだ。それでいて一度作った句に愛着も強く、永年に亘って同じ句に推敲を加えている。まさに芭蕉の精神を学んでいるのだ。

懸林 喜代次

燈下集



○ 渡辺若菜

山莊の荒るる垣根や蟬しぐれ
秋立つや藍の野良着のこぎん刺
置き去りのままのトロッコ野分雲
泣きやまぬ子に逆らへず残暑なほ
憂きことは心にたたみ秋扇

○ 西岡啓子

秋扇帯深くさす齡かな
新涼やみどりの屋根の風見鶏
秋立つと一滴づつの目薬よ
庖丁のにぶき切れ味つくつくし
今といふ刻をつくせり鬮雲

○ 中村紀美子

八朔の煮炊きの匂ふ大師堂
明日ひらく木槿や紅をふかく秘め
遠く鳴る太鼓の音や盆の月
年へるも母恋ふ心つくつくし
倒木にあざやかすぎる牽牛花

○ 小島昭夫

船津屋のかはうそ永久に月涼し（船津屋夫改裝）
裸の子少国民と呼ばれたる
秋めくや音なき音の山の音（川端康成の鎌倉）
休暇果つ『舞姫』を読む女高生
古酒や学なり難く齡重ぬ

○ 浅木ノエ

少年に言葉もどかしラムネ玉

武士へ不断の経や蟬時雨

伯父の文開けて八月十五日

折山に消えゆく文字や終戦日

あきかぜや築百年の梁の艶

○ 懸林喜代次

鳳凰堂映る水面や水馬

夏瘦の訳尋ぬればベットロス

流灯会京都アニメのキアラ幾つ

終戦忌とまやかすなかれ敗戦忌

秋出水軒に舟吊る元庄屋

○ 農谷ゆき江

ひまはりの迷路に探す父の声

秋晴や父在りし日の肩車

菩提寺の瓦普請や秋澄めり

後ろ髪引かれて帰る盆踊

思ひもかけぬその後の話秋扇

○ 後藤眞由美

蒼天や山の端にわく律の風

白桃の故地の香放ち届きけり

八月や被曝の十字架戻り来る（浦上天主堂）

送り火や所作しづしづと冷泉家

黍嵐いくさ場のごとく倒れ伏す

○ 川崎真樹子

左右の眼の色違ふ猫涼新た

立ち居のたび鳴りたる骨の音も秋

墓参すませ地下ホームの奈落

冷やかや胎児の形で眠る癪

秋声の襖のごとく耳漱ぐ

○ 木村梨花

一心に鳴く夕蟬や雨上がる

山の宿新蕎麦とある男文字

初秋のぼつんと浮くやはぐれ雲

前置きの長き祝辞や菊日和

渡り来る尾越の雁や湖青し

○ 溝越 教子

白鷺や明治の森の松の枝（明治神宮三句）

小砂利踏む跡に木の実の二つ程

秋冷の清正の井戸満々と

秋夕焼明日へ希望の入り日かな

浴槽に聴く虫の音やひと日終ふ

○ 齋藤 晴夫

負けて泣く青春愛し炎天下

金輪際草にすがりて蟬の殻

草引かぬ小庭の衰微終の日々

うつしみの哀歎淡く露けしや

牧野絵図に秋草尋ね緋佐子の忌（旧居は花野近くにありき）

○ 河崎 國代

信号を見計らひつつ片蔭出づ

鬼灯の落暉の色を我がものと

気詰りの黙執り成すやつくつくし

天窓に機嫌窺ふ鱗雲

秋の夜コロラトウーラの鈴鳴らす

○ 上野 進

いのちとは生暖かきもの袋角

湿り気の程好き崖や岩煙草

故郷は発ち去るところ花火の夜

川霧の山肌登る早さかな

親指の老いて淋しや衣被

○ 石橋 邦子

七十四年かへらぬ遺骨盆の月

秋風や少しばかりのものを蒔き

筆洗ふ影のみじかき宗祇の忌

振る舞うてくれし西瓜を畑に食ぶ

大潮に満潮かさね秋出水

○ 河本 由紀

ああすればかうすればの悔い秋血ちぬ

母の俯揺らす形見の秋扇

命果つる迄祈り続けむ原爆忌

あたら夜の月と友との語らひと

人為及ばぬ天災二百十日の来

余言

安立公彦

存へて昭和一桁敗戦忌

西川 保子

あの時と変はらぬ空や終戦日

佐藤 信子

八月十五日は、私たちにとって忘れることの出来ない日である。その日を知る人も、歴史として知る人も、全ての国民にとつて、八月十五日は忘れられない日である。前句の「昭和一桁」は、昭和元年から九年の間に生まれた人。私もその掉尾の一人故、この中七には愛着がある。小学校六年生だった。「存へて」には、人それぞれの深い思いが宿る。それはまた核兵器の否定にも結びつく、人各各の生き様を示す「ながらへて」である。

後句。中七の「あの時と変はらぬ空」は、敗戦を体験した人でないと詠めない。私は九州鹿児島でその日を迎えたが、晴れ上がった空の深みは忘れられない。それは体験した人全ての思いだろう。この両句は単なる回想ではない。戦いを否定する思いの句である。詠み継がれる題である。

塔映す水のつかれや秋の蟬

鈴木 直充

作者の六月刊行の第二句集『寸景』は、充実した句集である。その「あとがき」に、「年々、出合う風物が親しく懐かしく感じられるようになった」と記している。まさに「句作のこころ得」と言えよう。出合う風物と親しむところが即ち「句心」である。

掲出句、「水のつかれ」が、塔を写す湖沼を始め、歴史ある周辺の風景を描写している。「秋の蟬」との取合せも善い。一抹の侘しさをそこはかと無く感じる句である。

吾よりも先に逝くなよ生身魂

柴崎甲武信

先般上梓された『白地』は、柴崎富子第三句集である。平成十五年から三十年に至る三三三句を収めている。著者はこの句集上梓の際も入院中で、夫君甲武信さんの手に成った『白地』であった。へ色紙書く夫の背筋の淑気かな 富子と詠んだ富子さんへ、「吾よりも先に逝くなよ」と呼び掛ける甲武信さんの思い。その願望は「生身魂」の季語に籠められている。切ない呼び声だ。今は富子さんの恢復をひたすら祈るばかりである。

秋夕焼病みあることをふと忘る

太田 慶子

作者は目下闘病中だ。ふと窓を開けて西空を見ると、街並の彼方に赤色黄色の夕焼け空が拡がっている。単に「夕

焼」と言えば夏季となるが、秋の夕焼には、また違った感じの思いが浮かぶ。それは「赤」という色ゆえか。この句「病みあることをふと忘る」に、作者の俳人としての面目が善く表現されている。病という人為的な欠片が、「秋夕焼」という天然の現象に、そのかけらを補充されてゆく思いのする句だ。作者の快癒を祈るばかりだ。

諷詠は生くるみなもと炎天下

小泉 貴弘

作者は昨年十月号より療養中で、一年ぶりの出句である。筆跡も以前と変わらない。「諷詠」という言葉久しぶりに見た。詩歌をつくり、吟ずることが「諷詠」である。この句、その諷詠を「生くるみなもと」と詠む。まさにその通り。私たちが詠むことで俳句という詩型は息衝き、その俳句を詠むことで、私たち俳人はこころの活力を得るのだ。「炎天下」と言えども、その思いに変わりは無い。

夏帽子振つて別れを惜しみけり

本田 保

良く見る景である。いや、「景であった」の方が今の世相に合うのかも知れない。「夏帽子」が善い。例えば友と旅行に行つての帰り、帽子を振つて別れを告げることはよくあることだった。過去形で書いたが、今もこういう別れ

は残つていよう。ひとはそれぞれの日常を顧みて、それぞれの別れを振り返るのだ。俳句の思いは深い。

風鈴に夫婦の黙を救はるる

片山 博介

私小説の一場面とも言える景である。「夫婦の黙」が善く一句を支えている。この「黙」は、夫婦喧嘩とは別の、何とはなしの会話の途切れだろう。会話の接穂がなくなるという一時の黙は、何となく気まずいものである。

その黙を縁先に吊した「風鈴」が善く救っている。まさに「救はるる」である。些事にこそ句どころはある。今月号の通信欄に、著者筆大文字の送り火があった。絶佳。

遠く鳴る太鼓の音や盆の月

中村紀美子

「盆の月」は、陰暦七月十五日、盂蘭盆会の月。今年は陽暦の八月十五日に当たる。往事は「盆と正月が一緒に来た」とよく言つたが、現在「盆」の過ごし方も、墓参が主で、昔ほどの忙しさは見られないのではなからうか。

この句、「遠く鳴る太鼓の音」が、善く景を写し出している。市中とは言え郡部に近い山里の町だろう。さながら太鼓の音が、かすかに、しかも確かに聞こえて来るのだ。さらに「盆の月」の据りが善い。

当月集

安立 公彦選



○ 近藤真啓

朝顔やけふ為すことを書き出して

白桃に委ぬる時の流れかな

鉄棒に一日の余熱秋夕焼

限界の日々こそ笑顔衣被

終バスに眠る客人天の川

○ 池上昌子

どぜう鍋久しき顔の揃ひけり

朝練の影の長さや秋に入る

敗戦忌唯一葉の父の顔

新蕎麦や列車の汽笛遠くせる

知床の森深々と星月夜

○ 小林紫乃

蟬の穴ひいふうみいよななやここ

白壁の土蔵の罅や法師蟬

大井戸の底より響く秋の声

押入れの母に抱かれ終戦日

ゆつくりととろろする肩母の声

○ 山浦紀子

庭摘みの青紫蘇香るスパゲッティ

老犬の顎髪ぬらし西瓜食む

水道の蛇口の熱き原爆忌

往診の白衣赤とんぼを肩に

出港のテープ縛るる西鶴忌

○ 山下健治

秋気満つ上野の杜にモネ・ゴッホ(松方展)

苑深くひぐらしの声通り雨

野分して空を刷きぬる茜雲

星走りけやきの闇に消えゆけり

夜も更けて遠吠に覚む白露かな

春燈の句

安立 公彦選



誰も居ぬベンチ真昼の百日紅

兵庫 向井 芳子

朝の蟬墓の仏を覚ますがに

立秋の昨日と違ふ風の向き
諸掘りの園児に平和このさきも

原爆を語らぬ夫や原爆忌

絵馬揺るる四万六千日の昼

秋暑しポストに落つる鳥の糞

五箇山の古老の話聞く夏炉

霧の海浮きつ沈みつ白き馬

埼玉 大谷満智子

人それぞれ夢を結ぶや水引草

鎮魂の祈り捧げむ広島忌
新涼や白亜病棟丘の上

おだやかに日暮れてきたり酔芙蓉

時折の風夏秋にほると紅

砂時計見えて音なき秋思かな

雲流れ真昼静かや稲の花

ひぐらしと語るひと時妻の墓

神奈川 新海 英二

灯さずも夕ひぐらしの至福なす

むらさきの風の流るる紫苑かな
新涼や笹の葉擦れに風を聴く

父恋のふるさと遠し威銃

文机の陰にある声ちちろ虫

試し鳴きのごと始まりぬ虫の夜

おだやかにながるる処暑の寛水
煮炊きもの終へて厨の涼新た

黙禱の窓に寄る蟬父かとも

千葉 廣瀬 克子

ちちははよ令和初なる盆の月

古びたる団地にぎはし百日紅

福井 西本 花音

広島 浅田セツ子

千葉 東木 洋子